



Title	go/comeのダイクシス用法と非ダイクシス用法：具体的用法の場合
Author(s)	渡辺, 伸治
Citation	言語文化研究. 2016, 42, p. 219-239
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56204
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

go/come のダイクシス用法と非ダイクシス用法

—具体的用法の場合—

渡 辺 伸 治

Deictic and Non-deictic Use of *go/come*: Case of Concrete Use

WATANABE Shinji

Summary: In this paper the author discusses the deictic and non-deictic use of *go/come* which describes concrete movement, in contrast with Yamazoe (2004) who uses the notion of viewpoint as the criteria to classify the deictic and non-deictic use of *go/come*. The author defines deictic use as a use in which the deictic condition stipulated by Fillmore (1972) applies, whereas in non-deictic use this condition does not apply. *Go* is then classified into four types; 1) directional movement, 2) disappearance, 3) departure, 4) non-directional movement, and the author states that only the first use is deictic. *Come* is classified into three types; 1) moving arrival 2) arrival, and 3) appearance, of which 1) and 2) are deictic, while 3) is not. The author also carries out an analysis of some examples shown in Oe (1982) and examples taken from BibleGateway.

キーワード: go, come, ダイクシス, 視点

1. はじめに

英語の *go/come* のダイクシス¹⁾に関する先行研究は大きく分けて二つのタイプがある。一つは、具体的用法（空間的用法）に限定し、そのダイクシス性を詳細に考察する論考である。このタイプの論考は、*go/come* はダイクシス性を持つことが前提になっており、そもそもダイクシス性を持たない *go/come* の用法があるかどうかという問題意識はない。このタイプの論考は、古典的研究である Fillmore (1972), 大江 (1975) をはじめとして数多くある。また、日英語以外の *go/come* を考察対象に加え、類型論的な考察をおこなっている中澤 (2002, 2008), 澤田 (2013) などもある。

もう一つのタイプは、*go/come* のダイクシス用法と非ダイクシス用法という分類が問題にな

¹⁾ *go/come* のダイクシスがダイクシスの体系の中でどのように位置付けられるかに関しては、渡辺 (2012) を参照されたい。

る論考である。このタイプの論考は少ないが、重要な論考に山添（2004）がある。山添は、認知言語学の立場から go/come の具体的用法と抽象的用法の多義性を考察しているが、go には直示的用法と非直示的用法、come には直示的用法のみを認めている²⁾。

以上、go/come のダイクシスに言及する論考を二つのタイプに分けたが、本稿は後者のタイプの論考である。すなわち、本稿の目的は、go/come をダイクシス用法と非ダイクシス用法というタイプ分けの観点から考察し、go/come はともにダイクシス用法と非ダイクシス用法があることを述べることである。本稿では考察対象を具体的用法の go/come に限定するが、山添（2004）の考察と比較すると、山添も go には直示用法と非直示用法を認めているが、山添（2004）の分類は、本稿の go のダイクシス用法と非ダイクシス用法の分類とは異なるものである。また、山添は come には直示用法のみを認めているが、本稿は、come にはダイクシス用法だけではなく、非ダイクシス用法も認めるものである。

山添（2004）と本稿の見解の違いの根本にあるものは、ダイクシス（直示）用法の捉え方の違いである。すなわち、本稿にとっては、Fillmore（1972）が規定する go/come のダイクシスの使用条件が適用される用法がダイクシス用法であり、適用されない用法が非ダイクシス用法である。一方、山添（2004）に於ける直示は、名称は直示であるが、その本質は go/come の考察において頻繁に用いられる視点という概念であるという違いである。

それでは、次章では、Fillmore（1972）における go/come のダイクシスの使用条件を概観しよう。

2. Fillmore（1972）における go/come のダイクシスの使用条件

Fillmore（1972）は、go/come は以下に記述するダイクシスの使用条件を持つとしている。

使用条件（A）go：発話時に話し手が到着点にいない場合に使用できる

使用条件（B）come：次の条件が最低限一つ満たされている場合に使用できる

- （1）発話時に話し手が到着点にいる
- （2）到着時に話し手が到着点にいる
- （3）発話時に聞き手が到着点にいる
- （4）到着時に聞き手が到着点にいる

この規定に含まれる話し手（I）、聞き手（you）、発話時（now）という要素は発話場面構成要素であり、この点において go/come にはダイクシスが関与することになる。具体例を見ておこう。

- （1） a. *Go/come here!（聞き手に電話で）
 b. I must go/*come to Mr. Yamada's office now. He wants to meet me immediately.（話し手と同じ場所にいる聞き手に）

²⁾ 直示とダイクシスは同義で用いられることが多いが、山添（2004）の（非）直示的用法と本稿の（非）ダイクシス用法は異なる分類であるため、直示とダイクシスを併用する。

(1)aは、発話時に話し手が到着点にいる（発話場所が到着点である）ため、(B-1)が満たされ、(A)は満たされていない。そのためcomeは使用でき、goは使用できない。(1)bは、話し手、聞き手が発話時、到着時に到着点（Mr. Yamada's office）にいないため、(B)は満たされていない（(B-1)から(B-4)のいずれも満たされていない）。そのためcomeは使用できない。一方、発話時に話し手は到着点（Mr. Yamada's office）にいないため、(A)は満たされている。そのためgoは使用できる。

以上、Fillmore (1972) のgo/comeのダイクシスの使用条件（以下「go/comeの使用条件」と略記する場合がある）を概略したが、本稿では、go/comeの使用条件にもとづき、go/comeのダイクシス用法と非ダイクシス用法を次のように規定する。

ダイクシス用法：go/comeの使用条件が適用される用法

非ダイクシス用法：go/comeの使用条件が適用されない用法。すなわち、この用法では、
発話時、到着時に話し手、聞き手が到着点にいる（いた）かどうかは、
使用の適格性とは無関係である。

Fillmore (1972) は、go/comeのダイクシス用法のみを考察していることになるが、本稿は、go/comeにはFillmore (1972) が考察していない用法があり、それは非ダイクシス用法であることを述べるものである。なお、go/comeの使用条件には本稿にとって重要なポイントが二つある。

① 出発点という項が含まれていない。すなわち、本稿で規定するgo/comeの使用条件は、
出発時、発話時に話し手、聞き手が出発点にいる（いた）かどうかは無関係である。

② ダイクシスにもとづいた使用条件の規定であり、視点という概念を用いていない。

この二つのポイントは、以下に見る視点という概念を用いたgo/comeの考察では出発点が問題になるという点で関連している。次章では、視点を用いてgo/comeを分析しているFillmore (1972)、大江 (1975)、山添 (2004) を考察する。

3. 視点を用いた go/come の分析の考察

3.1. Fillmore (1972)

まず、Fillmore (1972) である。Fillmoreは、上で見たgo/comeの使用条件を説明した後、comeに関しては考察を続け、comeは使用条件(B)が満たされていない場合であっても使用できる場合があるとし、いくつかの使用条件を挙げている。そのうち以下に見る二つの使用条件は、他者の視点(point of view)を取っている使用条件とされ、Fillmore (1972) において初めて視点が言及されている(p.12)。一つは、発話動詞askのto不定詞中にcomeが現れた次のような場合（以下、「発話動詞構文」とする）である。

(2) She asked Fred to come to her party. (p.13)

(2) では、話し手、聞き手は「彼女のパーティー」に行かないものとする。comeの使用条件

(B) が満たされていないことになる。従って、comeの使用条件にもとづくと、comeは使用できないことになる。しかし、実際には(2)は適格である。これは、(2)では、主語sheの原発話としてPlease come to my party!といったような直接話法の発話が想定されるが、この発話では(B-2)が満たされているからである。発話動詞構文は、想定される直接話法でcomeの使用条件(B)が満たされていれば、comeを使用できるようになるということである。この規定はcomeの使用条件(B)を精密化する補足的使用条件と位置付けられる³⁾。

もう一つは3人称のフィクションの場合である。Fillmoreは、この場合に関しても、視点(point of view)という用語を用いて次のように説明している。

In pure third-person discourse (i.e., in discourse in which the identity and location of the Sender and the Addressee plays no role), the narrator is free to choose a point of view, such that movement toward the place or person whose point of view is assumed can be expressed with the verb COME.

Thus, in a third-person narrative, a sentence like

(3) The man came into her room.⁴⁾

indicates that the point-of-view is the location or the person inside the mentioned bedroom, something not indicated by a sentence like

(4) The man entered her bedroom. (p.15)

すなわち、3人称のフィクションでは、語り手は視点(point of view)を自由に取ることができるが、視点が置かれている人(場所)への移動はcomeで表すことができるということである。これは、視点が置かれている人(場所)から見て、comeの使用条件(B)が満たされればcomeを使用できるということであり、これも(B)の補足的使用条件である。

以上、概略したFillmore(1972)の視点の記述は次の二点が特徴的である。一つは、Fillmore(1972)では、視点は、comeのダイクシスの補足的使用条件の中で言及されているということである。すなわち、Fillmoreは、限定的に視点に言及しているのであり、comeは視点は到着点にあるといったような、視点の適用範囲を拡大し一般化したような記述をしていないということである。第二は、Fillmore(1972)ではgoは視点とは関係付けられていない点である。この二点は、大江(1975)、山添(2004)では異なっている。

3.2. 大江(1975)

大江は、まずFillmore(1972)のgo/comeのダイクシスの使用条件に言及するが、さらに、上

³⁾ comeの補足的使用条件は、comeの使用条件(B)が満たされていない場合にcomeの使用が可能になる条件という点で、comeの使用の可能性を広げる条件である。一方、goの補足的使用条件は、Fillmore(1972)は記述していないが、goの使用の可能性を狭める条件である。すなわち、goの使用条件(A)は、発話時に話し手がいる場合にはgoは使用できないということを規定しているだけであり、発話時に話し手がいなかった場合のgoの使用の適格性に関しては無規定である。しかし、発話時に話し手が到着点にいない場合であってもgoの使用が不適格になる場合があり、この場合がgoの補足的使用条件として記述されるということである。

⁴⁾ 引用中の例文の番号は本稿のものに合わせてある。以下、同様である。

で挙げた Fillmore (1972) の説明で挙げられている enter の例 (3), come の例 (4) に, Fillmore (1972) では挙げられていなかった go の例を加えた次の例⁵⁾を挙げ,

- (5) a. John entered Mary's room.
b. John went into Mary's room.
c. John came into Mary's room. (p.42)

「(5a) は全く中性的な描写であるが、(5b) は中性的な描写か John の視点に立った描写であり、(5c) は Mary の視点に立った描写である」(p.42) と述べている。さらに、大江は、「話し手が現実位置しようとしまいと、描かれる動きを彼がそこに身を置いて眺めるような場所を話し手のホームベースと呼ぶ」(p.43) と続ける。視点が置かれている場所が「ホームベース」であるが、引用中の「話し手が現実位置しようとしまいと」という語句は、会話文であってもフィクションであってもという意味である。大江は、この段階では、Fillmore (1972) ではテキストジャンルの 3 人称のフィクションに限定した形で用いられていた視点の適用範囲を拡大させ、会話文にも適用している。そして、最終的に、大江は、go/come の視点に関する特性を次のように規定している。

a. ユク, go

話し手または他者が話し手のホームベースを出発して動く。その動きを話し手が出発点から眺め、描く。

b. クル, come

話し手が自らのホームベースに位置し、話し手または他者の動きをその場所（到達点）への動きとして眺め、描く。

c. come

聞き手——結局は聞き手の視点をとる話し手——が聞き手のホームベースに位置し、ある動きをその場所（到達点）への動きとして眺め、描く。 (p.40)

この規定では、大江自身が (5b) に関しおこなっている、視点が中立的⁶⁾な go の用法が記述されていないため、大江がこの用法を認めているかは不明である。しかし、この規定は総括的な規定になっているので、便宜上、大江は go の中立的な視点を認めないとしてこの規定を端的に記述すると、大江は、すべての go は視点が出発点にある、すべての come は視点が到着点にあると規定していることになる。Fillmore (1972) では come の使用条件 (B) の補足的使用条件の中でのみ用いられていた視点が、大江では極限まで拡大解釈され、すべての go/come に見られる一般的特性として規定されているのである。

⁵⁾ 大江 (1975) では、Fillmore (1972) の he, her bedroom という語句が John, Mary's room となっている。

⁶⁾ 大江は「中立的」という表現を用いているが、以下、より一般的と思われる「中立的」という表現を用いる。

3.3. 山添 (2004)

山添 (2004) の直示は名称は直示であるが、上で見た大江 (1975) の視点と類似した概念である。以下、見ていこう。

山添はまず *deictic center* という名称の概念を次のように規定している。

deictic center (DC) とは、*come/go* の空間用法ならびにメタファーによる拡張用法において、話者の物理的・心理的な視点が存在する場所である。(p.7)

DC⁷⁾ は物理的・心理的な「視点」が存在する場所であるとされるが、DC としてまず発話場所が挙げられる。なお、上の規定中の「物理的」な視点が存在する場所とは発話場所のことである。山添 (2004) は、続けて、Fillmore (1972) の *come* の使用条件の (B-1) から (B-4) に含まれる場所、すなわち、発話時／到着時に話し手／聞き手がいる場所も DC としている。ここまでは出発点は DC と関係付けられていない。しかし、さらに説明を続け、「DC と関わる直示動詞 *come/go* の場合には、話者の視点が常にそれぞれ着点・起点に固定される。」(p.15) と述べ、*go* が出発点と関係付けられる。最終的には、山添は、「*come* の場合には、着点に視点がある。これに対し、*go* の場合には、起点に視点があるか視点が中立的になるかのいずれかである。」(p.18) とし、*go* は視点が出発点か中立的、*come* は視点が到着点と規定している。これは、大江 (1975) の規定とほぼ同じであるが、違いは、大江 (1975) は *go* に中立的な用法を認めるかどうかあいまいであったが、山添は、*go* に視点が中立的な用法を認めていることである。

以上、本節では、視点という概念を用いて *go/come* の分析をおこなっている先行研究を略述し、山添 (2004) の直示は視点であることを述べた。次節では、視点とダイクシス (の使用条件) に関し三つの点を補足説明する。

3.4. ダイクシスの使用条件・ダイクシス状況・視点

第一の補足は、視点をういた *go/come* の規定は、それ自体では使用条件の規定としては機能しないことである。すなわち、例えば、*come* の使用条件を「*come* は視点が到着点にある場合に使用できる。」と記述したとしても、視点が到着点にある場合はどのような場合かを *come* の使用とは独立に記述する必要が生じ、これは結局、*come* の使用条件を規定していることに他ならないということである⁸⁾。

第二の補足は、*go* のダイクシスの使用条件には出発点は含まれず無関係であるが、*go* が使用されている状況には、出発点とダイクシスが結び付いている状況があることである。例えば次の例である。

(6) It's late. I should be going. (LAAD)

⁷⁾ 山添は *deictic center* を略して DC と表記しているので、以下でも DC という名称を用いる。

⁸⁾ 大江 (1975) は、基本的概念が視点の論考であるが、例文の説明においては *go/come* のダイクシスの補足的使用条件として解釈できる記述を複数おこなっている。視点概念の複雑性に関しては渡辺 (1999) を参照されたい。

この状況は発話時に話し手が出発点にいる状況であるが、「発話時」、「話し手」は発話場面構成要素である点でダイクシスが関与している。本稿では、「発話時」あるいは出発時に「話し手」が出発点にいる状況を Radden (1996) を参考に「ダイクシスの状況」⁹⁾と名付けるが、Fillmore (1975) では挙げられていなかったが、大江 (1975)、山添 (2004) では挙げられている (7) の状況も go のダイクシスの状況である。

(7) John went into Mary's room. ((5) b の再掲)

すなわち、この例は、会話文とすると、出発時に話し手が Mary の部屋の外に位置し、John が Mary の部屋の中に入ったことを眺めていたことになるが、出発時に「話し手」が出発点にいた点でダイクシスの状況になっているのである。まとめると、go のダイクシスの状況は次のように規定される。

go のダイクシスの状況： 1) 発話時に話し手が出発点にいる状況

2) 出発時に話し手が出発点にいる状況

go のダイクシスの使用条件は、go が語彙に内在的に持っている特性であるが、ダイクシスの状況は、go が使用されている場合の状況の特性であり、go が内在的に持っている特性ではないという点で、両者は異なる概念である。例えば、(6) の go は以下で見る非ダイクシス用法の go がダイクシスの状況で使用されている例である。一方、(7) の go は以下で見るダイクシス用法の go がダイクシスの状況で使用されている例である。

なお、上で、大江 (1975)、山添 (2004) の go の記述では、出発点が問題になっていない Fillmore (1975) の go/come のダイクシスの使用条件の記述から始めたにもかかわらず、最終的には出発点が問題になる視点の記述に変容していることを見たが、大江、山添が Fillmore (1972) の例に付け加えた例文 (7) のダイクシスの状況がダイクシスの使用条件の記述と視点の記述の媒介をなしていると考えられる。すなわち、go のダイクシスの使用条件には出発点は含まれていなかったが、(7) のダイクシスの状況には出発点が含まれている。ここまではダイクシスの問題である。しかし、(7) のダイクシスの状況は、同時に、Mary の部屋の外にいる話し手が、視覚的に John が Mary の部屋に入ることを見ている点で、視覚的な視点が出発点にある状況にもなっている。ここでダイクシスの出発点と視点の出発点が結び付き、最終的に、「視覚的」という限定がはずれ、視覚的な視点の問題にならない (8) のような場合であっても、go は視点が出発点にあると記述されるということである。

(8) Are you going to the game this Saturday? (LAAD)

なお、本稿の観点からは (8) の go は、(7) の go と同じくダイクシスの用法であるが、ダイクシスの状況で使用されているのではないことになる。

第三の補足は、ダイクシスの使用条件にもとづく用法の分類をおこなうことの教育的意義と

⁹⁾ Radden (1996: 441f.) は、Fillmore (1972) の come の使用条件 (B) にある到着点を含め、come の使用が適格になる移動の到着点を 6 つ挙げ、これらの場所は deictic situation (ダイクシスの状況) であるとしている。ただし、go に関しては述べていず、ダイクシスの使用条件とダイクシスの状況の区別はしていない。

対照言語学的、類型論的考察における意義である。教育的意義というのは、例えば、電話の応答では、I'm going ではなく I'm coming であるというように教えるような場合である。この場合には、go の使用条件 (A) は満たされているが、実際には使用は不適格である。このような問題は、本稿では考察しないが、ダイクシスの使用条件を精密化する補足的条件の問題である。第一の補足と関連するが、視点を用いて例えば「come は視点が到着点にある場合に使用できる」と教えたとしても、go/come を正しく使用できるようにはならず、ダイクシスの（細かな補足的）使用条件を教えずにはならないのである。また、対照言語学的、類型論的考察における意義というのは、英語の go/come を他言語の go/come に対応する語彙と比較対照する場合である。例えば、澤田（2013）、中澤（2002, 2008）は、英語以外の言語の go/come に対応する語彙のダイクシスに関する使用条件を細かく記述し、どの言語の語彙ではどの使用条件が適用されるかを考察している。視点を用いると例えば日本語の「来る」も英語の come もすべて視点が到着点にあると記述されることになり、比較対照ができないのである。

以上、視点にもとづく分析とダイクシス（の使用条件）にもとづく分析に三点、補足説明を加えた。それでは、山添（2004）の go/come の分類を見ていこう。

4. 山添（2004）の go/come の分類と直示

4.1. 山添（2004）の go の用法の分類と直示

山添（2004）は、go には視点が出発点にある直示的用法と視点が中立的な非直示的用法を認めているが、go の具体的な用法として、①出発（直示的）、②進行（非直示的）、③消失（直示的）、④主観的移動（直示的）、⑤主観的移動（非直示的）を分類している¹⁰⁾。本稿では、①、②、③のみを考察対象とする。まず、①出発（直示的）と②進行（非直示的）をまとめて考察する。次の例である。

(9) a. Henry James *went* to England. (p.34) （出発（直示的）／進行（非直示的））

b. Henry James *went* from America to England. (p.34) （進行（非直示的））

(9)a と (9)b はともに到着点が共起し、到着手を指向した移動を表している。違いは出発点が共起しているかどうかであるが、この例に関して山添は次のように述べている¹¹⁾。

例えば、話者がアメリカ人でアメリカにいて、そこから Henry James がイギリスに移った場合は、(9)a の「出発（直示的）」に当てはまる。このとき DC は「起点」と重なる。また、文学者 Henry James に関する伝記中の一節のような場合は、(9)b の「進行（非直示的）」に当てはまる。このとき DC は「起点」にも「着点」にも重ならず、中立的

¹⁰⁾ 以下、山添（2004）の用法分類と本稿の用法分類を区別するために、山添の用法分類には山添が用いている（直示的）、（非直示的）という記述を付加する。

¹¹⁾ 引用中の (9)a の説明は上で規定したダイクシスの状況の記述になっていると思われる。

な位置にある。(p.34)

そして、この状況を以下の図で表している¹²⁾。

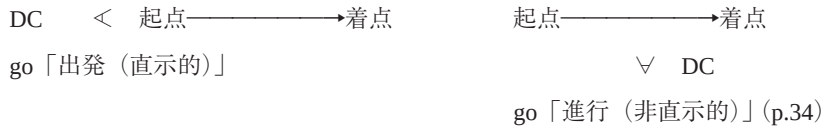


図 1

非直示的用法であってもDCがあるのは、山添にとっては発話場所はDCの一つだからである。山添にとってはすべての発話においてDCがあるわけだが、DCが起点あるいは着点にある場合にのみ直示的用法になるのである。

また、山添は進行（非直示的）の例としてさらに次の例も挙げているが、この例を進行（非直示的）とするのは、DCが起点あるいは着点にはないからである。

(10) She went through the forest for a few minutes, collecting food. (p.11)

以上、山添(2004)の出発（直示的）と進行（非直示的）を概略したが、ダイクシス（の使用条件）の観点からgo/comeを分類する本稿では、山添が挙げる(9)と(10)の例は、以下で見るように異なる分類になる。すなわち、山添は、(9)aのgoに出発（直示的）と進行（非直示的）の二つの用法を認め、(9)bのgoに進行（非直示的）のみを認めている。一方、本稿では、(9)aと(9)bのgoは、ともに到着点を指向した移動を表している点で同じく「着点指向移動」というダイクシス用法である。また、(9)aの非直示用法の読みのgo, (9b), (10)のgoは、山添(2004)ではすべて進行（非直示的）である。一方、本稿では、(10)のgoは、到着点を指向した移動ではない点で、「単純移動」という非ダイクシス用法である。

以上、山添(2004)の出発（直示的）、進行（非直示的）の概略だが、残った山添(2004)の消失（直示的）は、消失という用法自体は山添(2004)に従う。ただし、本稿の消失は非ダイクシス用法である。考察は次章でおこなう。

4.2. 山添(2004)のcomeの用法の分類と直示

山添(2004)は、comeには視点が到着点にある直示的用法のみを認めているが、comeの具体的用法として、①到達（直示的）、②出現（直示的）、③主観的移動（直示的）进行分类している。本稿では、①到達（直示的）と②出現（直示的）のみを考察対象とする。まず、山添は、到達（直示的）の例として(11)などを挙げている。

(11) a. Come here and look at this. (LDOCE3) (p.21)

b. The snow came down during the night. (CIDE) (p.21)

¹²⁾ 図は簡略化してある。視点はAで表してある。

- c. I'll *come* and pick you up in the car if you like. (CALO, CIDE) (p.21)

本稿では、到達（直示的）は山添（2004）に従い、本稿でもダイクシス用法とする。ただし、以下で見るもう一つの用法と区別するために、名称は「移動到着」に変更する。また、山添は出現（直示的）の例として（12）などを挙げている。

- (12) a. And from behind the six large figures before them *came* a seventh, smaller boy, smirking all over his pale, pointed face. (J. K. Rowling, HARRY POTTER and the Chamber of Secrets) (p.23)
- b. The baby *came* around midnight. (プログレッシブ4) (p.23)
- c. The moon *came* and went. (ジーニアス3) (p.23)
- d. A shy and tentative smile *came* to the girl's face and then she turned and went out of the room. (p.23)

本稿では、出現（直示的）も山添（2004）に従い、本稿でも「出現」とする。出現はダイクシス用法である¹³⁾。しかし、本稿では、さらに、山添（2004）の到達（直示的）、出現（直示的）とは異なるもう一つ別の用法を規定する。次章では、この用法も含め本稿のgo/comeの分類をおこなう。

5. go/comeの用法の分類とダイクシス

5.1. goの分類とダイクシス

本節ではドイツ語のgehenの用法とダイクシスの関係を考察した渡辺（1988, 2010）を参考に、goの用法を、①着点指向移動、②消失、③出発、④単純移動の四つの用法に分類する。そして、このうち着点指向移動のみがダイクシス用法であることを述べる。他の三つの用法がダイクシス用法ではないのは、これらの用法では、到着点は問題にならないため、到着点が問題になるgoのダイクシスの使用条件は適用されなくなるからである。

まず、①着点指向移動である。これは、移動が到着点を指向した移動であり、到着点を表示する語句が共起した場合である¹⁴⁾。例えば次の例である。

- (13) a. Are you going to the party? (ウィズダム)
- b. Which bus goes to the station? ¹⁵⁾ (ウィズダム)
- c. I have to go there tomorrow. (ウィズダム)

¹³⁾ ただし、出現のcomeでは、完全にはcomeのダイクシスの使用条件が適用されないと考えられるが、出現のダイクシス性の詳しい考察は今後の課題とし、ここでは、暫定的に出現をダイクシス用法と規定して記述しておく。

¹⁴⁾ goと到着点が共起する用法に関し、山添（2004）は、「「着点」を示すto the forestは、goの語彙情報自体には含まれない追加情報である。だからこそ「着点」に関心が注がれる場合には、追加的に言語化されなければならない。」(p.12)と述べている。go自体には着点が含まれていないことは本稿も認めるものである。着点到着移動はgo自体に認められる用法ではなく、go + 方向規定詞という構文に認められる用法である。

¹⁵⁾ この例は、発話時に話し手が出発点にいる場合は、上で規定したダイクシスの状況になっている。

この用法は、goのダイクシスの使用条件が適用されるダイクシス用法である。すなわち、(13)では発話時に話し手は到着点にいないので、goの使用条件(A)が満たされている。そのため適格である。一方、(14)のgoも着点指向移動であるが、goの使用条件(A)が満たされていないため不適格になる。

(14) *Go here!

②消失は、用法的には山添(2004)の消失(直示的)と同じで、出発点に存在したものが存在しなくなることを表す用法である¹⁶⁾。(15)は山添(2004)が出発(直示的)の例として挙げているものである。

- (15) a. I left my bike outside the library and when I came out again it had *gone*. (OALD6) (p.37)
 b. The door was open and all his things had *gone*. (LDOCE4) (p.37)
 c. The sun came and *went*, thunder clouds growling and swirling up the valley. (p.37)

ただし、本稿の消失は非ダイクシス用法である。これらの例は、出発点において存在したものが存在しなくなることを表しているものであり、到着点を指向した移動があったことを表しているわけではない。また、話し手は、到着点がどこかということは意識していない。そのため、到着点が問題になるgoの使用条件は適用されないからである。従って、(15)の例は、話し手がどこで発話しようとも適格になる。

③出発は、移動主体が出発点を出発することを表す用法である¹⁷⁾。例えば、次の例である。

- (16) a. When you go, please turn off the light. (ウィズダム)
 b. Come on, let's go. (ウィズダム)
 c. What time does the train go? (ウィズダム)

出発も非ダイクシス用法である¹⁸⁾。これらの例でも、消失と同じく、goは到着点を指向した移動を表しているわけではない。また、話し手は、到着点がどこかということを意識していない。そのため、到着点が問題になるgoの使用条件は適用されなくなるからである。ただし、出発は消失と異なる点がある。すなわち、出発の場合には、到着点がどこか話し手は知っている可能性があるということである。例えば、(16)bは、どこかに行く用事があるという状況で、出発を促しているという状況の発話と解釈できる。この場合には話し手は到着点を知っていることになるが、到着点を知っているからといって、話し手は、goの発話の時点で到着点(を指向した移動)を意識しているわけではない。このことは、次の例が端的に表している。

(17) I think Ken is already gone.

この例の状況は、自宅から話し手の家に来ることになっているケンに何かを持って来てもらおうという話になり、それでは今から電話して頼もうということになったという状況とする。し

¹⁶⁾ LAADはgoの語義の一つとしてdisappearを挙げている。

¹⁷⁾ LAADはgoの語義の一つとしてleave somewhereを挙げている。

¹⁸⁾ 従って、山添(2004)の出発(直示的)とは異なる。ただし、(16)bは発話時に話し手が出発点にいないので、上で規定したgoのダイクシス状況にはなっていない。

かし、話し手はケンはまだ出てしまったから電話しても無駄だと思っている状況とする。そうすると、言語外世界の状況としては、ケンの、話し手の家を到着点とする移動が生じることになる。しかし、これはあくまで言語外世界の状況である。話し手は、goの発話の際にはケンの出発（点）のみが意識にあり、ケンの移動の到着点が話し手の家であることは意識していないのである。一方、話し手が、ケンの移動の到着点が話し手の家であることを意識した場合には、次の例が示すように、着点指向移動のgoは使用できないことになる。

(18) *Ken will go here soon.

なお、出発は消失と類似する用法であるが、違いは、消失は出発点に存在した移動主体が出発点に存在しなくなることを表す用法であるが、出発は移動主体が出発点から移動を開始することを表す用法ということである。

④単純移動は方向性のない移動を表す用法である。例えば次の例である。

(19) a. Halt! Who goes there? (ウィズダム)

b. The car was going 80 miles an hour when it went out of control. (ウィズダム)

c. She went through the forest for a few minutes, collecting food. ((10)の再掲)

この用法では話し手は出発（点）も到着（点）も意識していない。そして、この用法も到着（点）が無関係であるので、非ダイクシス用法である。もちろん、出発の場合と同じように、話し手は、単純移動のgoが表す移動の到着点を知っている可能性はある。例えば、(19)bの言語外世界の状況は、車は話し手が出席するパーティーに行くために乗っていた車で、発話場所はパーティー会場とする。そうすると話し手は当該の移動の到着点は発話場所であるパーティーであることを知っていることになるが、話し手は、(19)bのgoの発話の際には、到着（点）を意識しているわけではないのである。

5.2. comeの到着用法

本稿ではcomeは三つの用法を認めるが、そのうち二つの用法は、上で述べたように山添(2004)の分類に従っている。すなわち、移動到着（山添(2004)では到達（直示的））と出現である。本節では、山添が考察していないもう一つ別の用法を考察する。すなわち、本稿では到着と名付ける用法である。到着は非ダイクシス用法である。以下、見ていこう。

Radden (1996)は抽象的用法のcomeを考察しているが、具体的用法のcomeに関しても、簡単にではあるが、本稿にとって重要な指摘をしている。すなわち、Radden (1996)は、まず、comeが用いられている(20)aは、goが用いられている(20)bとは異なり不適格であるとしている。

(20) a. *He came to the airport to pick up his friends. (p.431)

b. He went to the airport to pick up his friends. (p.431)

comeが不適格である理由は、本稿の立場からは、(20)aのcomeはダイクシス用法である移動

到着の come であるが¹⁹⁾、(20)a では come のダイクシスの使用条件が満たされていないからである¹⁹⁾。続いて (21) を挙げ、次のように述べている。

- (21) a. *By the time he came to the airport, the plane had already left.* (p.431)
 b. *Now comes the main point.* (p.431)

If, however, the goal is seen as being reached following a certain sequential order, the use of *to come* is licensed due to its focusing property on the final phase of the motion. Thus, the sentences with *to come* under (21) do not describe deictic situations but situations of physical or mental motion which lead up to a final end-point: (p.431)

(21)a は、come の使用条件が満たされていなくとも適格になる。すなわち、発話時に話し手／聞き手が空港にいないくとも、また、主語 *he* が空港に着いたときに話し手／聞き手が空港にいないくとも適格になる。本稿の立場からは、この come は非ダイクシス用法の come であり、これが本稿で規定する到着の come である。さらに、Radden (1996) は上の引用に挙げた箇所とは別の箇所で次のようにも述べている。

The notion of the terminal phase of a physical motion or a course of events described by the *come*-situation closely relates to the sense of ordered sequence, which is often associated with *to come* as in:

- (22) a. *Parents come first, and then the children.*
 b. *After a storm comes a calm.*
 c. *All of you got your share. Where do I come in?*

The sense of ordered sequence may be in conflict with the deictic situation imposed by *to come* (see section 3.2). Comrie (1985: 16) gives the example of a journey description in which the end-point serves as the deictic center and is referred to by *to come*: [*We went to London and Oxford*]²⁰⁾ and at last we came to Canterbury. (p.428)

この記述に見られる、Comrie (1985) からの引用である次の例も、come の使用条件が満たされていなくとも適格になる。

- (23) *We went to London and Oxford and at last we came to Canterbury.*

すなわち、発話時に話し手／聞き手がカンタベリーにいないくとも適格になる。本稿の立場からは、この come も非ダイクシス用法の come であり、到着の come である。以上、Radden (1996) (と Comrie (1985)) の例ならびに Radden の記述を引用し、本稿の come の到着の例を見たが、それでは、この用法はどのような用法であり、移動到着の come とはどのように異なるのであろうか。以下、考察する。

まず、上の Radden の説明にもとづき、本稿では到着の come は次の二つの特性を持つと規定

¹⁹⁾ もちろん (20)a であっても、発話時に話し手／聞き手が空港にいる、あるいは主語 *he* が空港に着いたときに話し手／聞き手が空港にいた場合には、come の使用条件が満たされていることになり、(20)a は適格になる。

²⁰⁾ Comrie (1985) では *We went to London and Oxford* の部分は記述されていないため、Radden (1996) では [] が付けられている。

する。

A：到着の come は移動の最終的局面を焦点化する

B：到着の come は一連の順序で生じる出来事に続いて到着が生じることを表す。

最初に、Aの特性である。移動到着と出現の come は、ともに到着は焦点化されているが、移動は必ずしも焦点化されているとは限らない。この点に関し、山添 (2004) は、到達 (直示的) は「起点—経路—着点スキーマにおいて「経路+着点」がプロファイルされ常に重要な要素となる。」(p.22) と述べている。一方、出現 (直示的) は「移動という動的プロセスは背景化され、「着点」のみがプロファイルされる。」(p.23) と述べている。すなわち、本稿の移動到着用法は移動、到着がともに焦点化されている用法であるが、出現用法は到着が焦点化され、移動は背景化されている用法ということになる。それでは、到着の come はどうであろうか。本稿では、この come は、移動の焦点化／背景化に関しては、移動到着用法と出現用法の中間的な性質を持つと考える。すなわち、焦点化／背景化にスカラーを認め、到着用法の移動は移動到着用法の移動ほどは焦点化されていないが、出現用法の移動よりは焦点化されているということである。

以上、移動到着と到着の相違²¹⁾であるが、違いを類義関係の観点から見ておこう。まず、到着は移動到着よりも移動が背景化されている点で、arrive, get to などと類義関係にある。このことは、(21)a, (23) の come は arrive, get to で置き換えることができる点にも表れている。一方、移動到着は移動も焦点化されている点で、go の着点指向移動用法と類義関係にある²²⁾。例えば、命令形が用いられている次の例では go の場合も come の場合も移動が焦点化されていることにはかわりはない。

(24) Go/come to Mr. Yamada's office now!

続いて、Bの特性である。まず、(21)aの場合には、一つの出来事として、空港への移動、到着があり、一連の順序で生じる、より細分化された下位の出来事として、空港に移動するという出来事と空港に到着する出来事がある。例えば、(21)aに先行する発話として、He went to the airport といったような発話が想定でき、続いて、空港に到着したことが come で表されているということである。また、(23)では、最終目的地がカンタベリーである一つの出来事としての旅程があり、その中で、一連の順序で生じる、より細分化された下位の出来事としてロンドンに行ったこと、オックスフォードに行ったことが表わされ、最後にカンタベリーに着いたことが come で表わされているということである。最後に (21)bでは、一つの出来事としての会議があり、その中で、一連の順序で生じる、より細分化された下位の出来事としてAという議

²¹⁾ 本稿では焦点化／背景化にもとづく違いを述べたが、さらに動作主性、意志性などに関する違いもあると思われる。詳しい考察は別稿でおこないたい。

²²⁾ LAAD は come の語義の一つとして move to を記述している。また、LAAD はもう一つ語義として arrive も記述している。ただし、arrive は to などの方向性を持つ語句とは共起しない。到着の come と arrive, get to は類似するが、違いもある。どのような違いが認められるのかの考察は今後の課題としたい。

題の議論、Bという議題の議論が想定でき、最後に主たる議題の議論がなされることがcomeで表されている。

なお、(21)bは、(21)a, (23)とは異なる点が二つある。一つは、(21)a, (23)のcomeは、arrive, get toで置き換えることができるが、(21)bのcomeはこれらの動詞で置き換えることができない点である。もう一つは、(21)a, (23)ではcomeの主語は想定される他の出来事でも移動主体になっているが、(21)bではcomeの主語は想定される他の出来事の移動主体にはなっていない点である。(21)bのcomeは本稿では考察対象としない抽象的用法のcomeであるので、ここでは考慮しないものとする。

以上、Bの特性の説明であるが、本稿ではBの特性を、到着のcomeの語用論的前提²³⁾に関する使用条件と捉える。すなわち、到着のcomeを使用するためには、先行文脈において、当該のcomeが表わす移動が述べられているか、少なくとも、聞き手にとってcomeが表わす移動が生じる(生じた)ことが既知であるという状況でのみ用いられるという使用条件である²⁴⁾。例えば、(25)の状況は、発話時／山田のフランクフルトへの到着時に話し手／聞き手が大阪にいた(従ってcomeのダイクシスの使用条件が満たされていない)とする。

(25) By the way Mr. Yamada came to Frankfurt yesterday evening.

この状況では、comeは、移動到着の読みの場合には、ダイクシスの使用条件が満たされていないために、不適格になる。一方、到着の読みの場合には、山田がフランクフルトへ移動することを聞き手が知らなかった場合には不適格だが、知っていた場合には適格になる。

なお(25)の状況がダイクシスの使用条件が満たされている状況の場合には、移動到着のcomeは、到着のcomeが持つ語用論的前提を持たないので、山田がフランクフルトへ移動することを聞き手が知らなかった場合であっても使用が適格になる。

以上、到着のcomeのAの特性とBの特性を説明したが、Aの特性とBの特性は、背景化／潜在化に関し中間的な位置付けがなされた移動というプロセスが到着のcomeの使用の語用論的前提となっている点で関係していることになる。

本節では、以上、comeの到着用法を移動到着用法と比較しながら考察したが、次節では、大江(1982)が挙げている例を用いて、comeの移動到着と到着の用法の考察を続ける。

5.3. 大江(1982)の例の考察

大江(1975)が視点をgo/comeの基本的な説明原理としていることを上で見たが、大江(1982)は「継続的あるいは同時的に起きるできごとに視点を置いて用いられるcome」(p.193ff.)とす

²³⁾ 語用論的前提に関してはLevinson(1983)を参照されたい。

²⁴⁾ この使用条件では発話場面構成要素である「聞き手」が問題になる点でダイクシスが関与するが、この語用論的使用条件は、本稿が定義するダイクシスの使用条件ではなく、到着のcomeはダイクシス用法とはならない。本稿のダイクシス用法は、話し手／聞き手がどこにいるかが使用の適格性と関連する用法であるが、この語用論的使用条件は話し手／聞き手がどこにいるかは無関係だからである。

る用法を考察している。以下、見ていくことにする。まず、次の例である。

(26) a. Yesterday I came to the store and bought some whisky.

b. Yesterday I went to the store and bought some whisky. (p.193)

(26)aのcomeが移動到着のcomeか到着のcomeかの判断はできないが、便宜上、移動到着のcomeとする。そして、状況は、comeの使用条件が満たされていない状況とする。そうすると、comeの使用が適格になる補足的な使用条件を記述する必要があるが生じるが、この点に関して大江は次のように述べている。

(26)aでS1 and S2のS1にcomeが用いられるが、これはS2が表わすできごと、とりわけそれが生じた場所the storeに話し手の視点が置かれたためである。goを用いるbではS1が表わす動きを眺める視点は出発点で、S2の先取りはない。(p.193)

続けて、「実際にはこのように明確な視点の分析はできないが、同類のcomeとみられるものの例を(27)に示す」(p.193)として次の例などを挙げている。

(27) a. We all went out into the hall. As we came toward the front door a letter came through the box and fell on the mat. ----Christie (p.194)

b. I waited a bit, then I came up to him. 'If there's anything I can do, Griffith, tell me?' ----ibid. (p.194)

c. I quickened my pace. But as I came up to them, Megan turned on her heel and went off in the other direction. ----ibid. (p.194)

(27)のcomeは、toward, upが付加され、移動到着のcomeと考えられるが、(27)の状況はすべてcomeの使用条件が満たされていない状況である。そのため、この場合もcomeの使用が適格になる補足的な使用条件を規定する必要がある。そして、大江は(27)に関しても次のように述べている。

aはふつうにwentで始まりながら、次の文で同じ動きがcameで表現されている。それは次に来るa letter came...が表わすできごとに視点を置き動きが眺められるようになったからである。bはI came up to himで文が終わっているが、実際は...and said to himの気持ちがある。その発話内容が次の直接話法の文である。cでもas I came up to themが表わす動きはあとに来る主節の内容、同時的あるいは直後的できごとに視点を置いて眺められている。(p.195)

(26), (27)の例は視覚的な視点が問題になる状況であるが、視点を用いずに当該のcomeの使用の適格性を説明すると次のようになる。すなわち、(26), (27)は会話文ではあるが、話し手が過去に体験した出来事の語りの部分である。そして、移動主体は話し手(を含む人)である。さらに、大江が指摘するように、comeの発話の後に、話し手が視覚的に体験した到着点での出来事が記述されている。このような条件が満たされている場合には、移動到着のcomeは、ダイクシスの使用条件が満たされていない場合であっても使用が適格になるということであ

る²⁵⁾。

続いて大江(1982)が挙げているもう一つの例を見る。大江は説明をさらに続け、「ここでみたcomeは動きが継時的または同時的なできごとから眺められることから生じているのだが、それは視点の置かれるできごとがふつう話し手にとって意識に強く浮かぶ重要なものだからである。」(p.195)とまとめたあと、「視点の置かれるできごとが明示できなくとも、動きの到達点がきわ立って強い、重要なものとして話し手に意識される場合にはcomeが生じる。」(p.195)と述べ、次の例を挙げている。

- (28) The boat was light and rowed easily. I pulled it along in the dark water. I could not see, and hoped we would soon come opposite Pallanza. ----Hemingway (p.195)

この場合もcomeのダイクシスの使用条件が満たされていない状況でcomeが使用されているが、大江はその要因を「動きの到達点がきわ立って強い、重要なものとして話し手に意識される」ことに求めている。しかし、本稿の立場からは、ここでcomeが使用できるのは、このcomeは、get toなどで書き換えられる非ダイクシス用法の到着のcomeだからである。

5.4. BibleGatewayの例の考察

本節では、comeのダイクシスの使用条件が満たされていない状況でcomeが使用されている事例をBibleGateway²⁶⁾のNRSV(新改訂標準訳聖書)から検索し、当該箇所が、他の英語訳聖書ではどのような語彙で表されているかを関連させながら、移動到着と到着のcomeを簡単に考察する。検索は可能な限りcomeの使用条件が満たされている例を最初から排除するため、主語をweにした形でおこなう。以下、過去形のwe cameという検索語で検索した結果を述べる。これは17件ヒットしたが、他の英語訳聖書で用いられている語彙により大きく三つのタイプに分かれる²⁷⁾。

タイプA：他の聖書ではcomeと並んでarrive, get to, reachが用いられるタイプ

タイプB：他の辞書ではcomeと並んでgoが用いられるタイプ

タイプC：他の聖書でもほとんどcomeが用いられるタイプ

以下、それぞれの例を一つだけ挙げる。まずタイプAの例である。

- (29) ³¹ Then we left the river Ahava on the twelfth day of the first month, to go to Jerusalem; the

²⁵⁾ 基本的にgo/comeの補足的な使用条件は複雑な様相を示すが、comeの発話の後に到着点での出来事が記述されているという条件だけではcomeが使用できるようなにはならない。例えば、眼前にいる聞き手に話し手がPlease go/*come to Mr. Yamada's office now and give the package to him.と発話するような場合には、到着点での出来事の記述が続くが、comeは使用できない。comeの時制、法、テキストジャンルなどさまざまな要因が絡んでいると考えられる。また、人称も関係するかもしれない。大江(1982)は、(26)と並んで主語が3人称になっている例を挙げているが、少なくとも、当該の例は原発話が1人称である自由間接話法の例と考えられる。さらに、「視覚的に体験した出来事」かどうかに関係するかもしれない(これを「視覚的な視点」として限定的に視点をを用いてダイクシスの使用条件の中に組み込むことは可能である)。さまざまな要因が考えられるが、この問題の解明は今後の課題としたい。

²⁶⁾ BibleGateway (<https://www.biblegateway.com/>)は聖書のさまざまな外国語翻訳を掲載したサイトである。英語訳聖書としては約50の聖書が挙げられている。

²⁷⁾ 英語訳聖書は翻訳であるため、原語の影響を受けていることが考えられるので、傾向としてのタイプ分けである。

hand of our God was upon us, and he delivered us from the hand of the enemy and from ambushes along the way.³² We came to Jerusalem and remained there three days.

(Ezra 8:31-32)

この例では、comeの聖書が28, arriveの聖書が18, reachの聖書が4あった。goの聖書はなかった。この例は、comeの前に到着点への移動が生じたことを表すgo to Jerusalemという語句があり、エルサレムへの移動が生じることが先行文脈で明示されている。また、エルサレムへの道中に関する記述がなされている。さらに、当該のcomeは、他の聖書ではarriveが用いられている場合が多い。これらの点を考慮に入れると、このcomeは到着のcomeであると考えられる。なお、当該箇所は新共同訳聖書では「到着する」になっている。続いて、タイプBの例である。

- (30) ²⁶ And they came to Moses and Aaron and to all the congregation of the Israelites in the wilderness of Paran, at Kadesh; they brought back word to them and to all the congregation, and showed them the fruit of the land. ²⁷ And they told him, “We came to the land to which you sent us; it flows with milk and honey, and this is its fruit.

(Numbers 13:26-27)

この例では、comeの聖書が23, goの聖書が14, arriveの聖書が1あった。get to, reachの聖書はなかった。このcomeが移動到着なのか到着なのかのコンテキスト上は明確ではないが、当該箇所は新共同訳聖書では「行って来ました」になっている。goが多いこと²⁸⁾と日本語訳のみにもとづけば、移動到着のcomeということになろう（到着のcomeの読みの可能性もある）。移動到着のcomeとすると、comeに続く記述は、到着点である土地の一般的な記述であり、そこで生じた具体的な出来事が視覚的な視点から描写されているわけではないため、前節で見た大江(1982)にもとづくcomeの補足的使用条件の一部「話し手が視覚的に体験した到着点での出来事の記述」が満たされなくなる。そのためcomeが使用しにくくなり、comeと並んでgoで訳されている聖書が比較的多くなっていると思われる。最後にタイプCの例である。

- (31) ¹⁹ So they went up to the steward of Joseph’s house and spoke with him at the entrance to the house. ²⁰ They said, “Oh, my lord, we came down the first time to buy food; ²¹ and when we came to the lodging place we opened our sacks, and there was each one’s money in the top of his sack, our money in full weight. So we have brought it back with us. (Genesis 43:19-21)

この例では、comeの聖書が30, arriveの聖書が2, get toの聖書が1あった。goの聖書はなかった。この例は、come以外の語彙を用いている聖書が少なく、移動到着のcomeなのか到着のcomeなのか判断がむずかしいと思われるが、移動到着のcomeとすると、状況的には、(30)とは異なり、comeに続く記述は、到着点である宿で生じた具体的な出来事が視覚的な視点から描写されている。そのため、「話し手が視覚的に体験した到着点での出来事の記述」という補足的使用条件も満たされていることになり、移動到着のcomeが使用されやすくなっていると考えられる。

²⁸⁾ goが多いことが移動到着のcomeの認定と結び付くのは、上で述べたように類義関係が認められるからである。

なお、当該箇所は新共同訳聖書では「ところが、帰りに宿で袋を開けてみると、」になっている。また、当該の come は到着の come の読みも十分可能だと思われるが、そうだとすると、類義関係にあるとした arrive, get to を用いた聖書がほとんどないことを説明する必要がある。これが偶然なのか、あるいは何らかの要因にもとづくのか、到着の come, arrive, get to の違いの解明も含め、さらなる考察が必要である。

以上、本節では簡単なものではあるが、we came という語句が NRSV で現れている箇所を挙げ、その部分が他の聖書ではどのような語彙が用いられているかと関連させながら、移動到着と到着の come を考察した。結果として A, B, C の三つのタイプを分類した。検索例が少なく、移動到着なのか到着なのか判断も難しく、また、データが翻訳であるという問題もあるが、A, B, C のタイプが見られるのは、come の移動到着と到着の用法の違いを反映していると考えられる。

6. おわりに

以上、本稿では、具体的用法の go/come のダイクシス用法と非ダイクシス用法を考察した。第二章では、ダイクシス用法の go/come とは Fillmore (1972) のダイクシスの使用条件が適用される用法であり、非ダイクシス用法の go/come とはそれが適用されない用法と定義した。第三章では、視点にもとづく go/come の分析を考察し、ダイクシス的情況という概念を設定しながら、ダイクシスの使用条件にもとづく分析との違いを考察した。第四章では山添 (2004) の用法分類を紹介し、第五章では本稿の用法分類をおこなった。go の用法としては、着点指向移動、消失、出発、単純移動の四つの用法を分類し、着点指向移動のみがダイクシス用法とした。他の用法は、到着点が無関係になるので、非ダイクシス用法とした。come の用法としては、移動到着、到着、出現の三つの用法が分類したが、移動到着と出現は山添 (2004) の分類に従ったものであり、これらはダイクシス用法とした。山添 (2004) では分類されていなかった到着は非ダイクシス用法とした。そこでは、到着の語用論的前提に関する使用条件も規定された。さらに、第五章では、大江 (1982) が視点にもとづき説明している例を考察し、移動到着の come のダイクシスの補足的な使用条件を規定した。また、BibleGateway の NRSV から、come の使用条件が満たされていない状況で使用されている we came の例を検索し、当該の箇所が他の英語訳聖書ではどのような語彙が用いられているかを見ながら、come の移動到着と到着を考察した。結論として、基本的には、come の移動到着と到着の用法の区別が他の英語訳聖書の語彙選択にも反映しているとした。

以上、本稿のまとめだが、今後の課題も数多くある。本文中でもさまざまな課題に言及したが、本稿では移動の焦点化／背景化の程度の違いにより区別した移動到着と到着のさらなる相違の解明、到着の come/arrive/get to の相違の解明などの問題がある。また、大きな問題としては、

本稿の go/come の具体的用法の分類にもとづくと、go/come の抽象的用法はどのように記述されるかという問題もある。今後の課題は数多くあるが、本稿は最初の一步の考察ということにし、本稿を終えることにする。

謝辞

本稿を執筆するにあたり複数の匿名の査読者から貴重なコメントを多数いただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。

参考文献

- Comrie, B. (1985) : *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fillmore, C. J. (1972) : How to know whether you're coming or going. In: *Descriptive and Applied Linguistics* 5. Tokyo. I.C.U. pp.2-17.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店.
- Levinson, S.C. (1983) : *Pragmatics*. Cambridge. Cambridge University Press.
- 中澤恒子 (2002) : 「来る」と「行く」の到着するところ」生越直樹 (編) 『対照言語学』 pp.281-304. 東京大学出版会
- 中澤恒子 (2008) : 「come」が「来る」でないとき」長谷川／ラマール／伊藤 (編) 『こころと言葉』 pp.113-127. 東京大学出版会
- 大江三郎 (1975) : 『日英語の比較研究——主観性をめぐって』 南雲堂
- 大江三郎 (1982) : 『講座・学校英文法の基礎 第四巻 動詞 (I)』 研究社出版
- Radden, G. (1996) : Motion metaphorized: The case of *coming* and *going*. In: *Cognitive Linguistics in the Redwoods*, ed. E. H. Casad, pp.423-458. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 澤田淳 (2013) 「COME / GO の直示情報と選択システム—直示的中心の下位区分と階層化の視点から—」 児玉一宏・小山哲春 (編) 『言語の創発と身体性—山梨正明教授退官記念論文集』 pp.359-385. ひつじ書房
- 渡辺伸治 (1988) : 「現代ドイツ語移動動詞 gehen/kommen の共感性特性について」『教養学部教養学科紀要』 20. pp.59-76.
- 渡辺伸治 (1999) : 「視点」諸概念の分類とその本質」『言語文化研究』 25. pp. 389-402.
- 渡辺伸治 (2012) : 「直示とコンテクスト」澤田 (編) 『ひつじ意味論講座 意味とコンテクスト 第6巻』 pp.1-18. ひつじ書房
- Watanabe, S. (2010) : Zur Deixis von *gehen*. In: *Akten des XII. internationalen Germanistenkongresses Warschau 2010*. pp.203-208.

山添秀剛（2004）：『移動動詞 come/go の意味ネットワークならびに状態変化用法に関する認知言語学的考察』大阪市立大学博士論文．（<http://jairo.nii.ac.jp/0150/00001332>から入手）

辞書

Longman Advanced American Dictionary. 1st edition. (LAAD)

『ウィズダム英和辞典』第2版 三省堂（ウィズダム）

『ジーニアス英和辞典』改訂版 大修館（ジーニアス）

その他

新共同訳聖書 1987年版